

Title	理財学会大会記事
Sub Title	
Author	
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.4, No.1 (1910. 7) ,p.125- 129
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	三田学会記事
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19100700-0126

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田學會記事

但し最近に於ける希臘の國狀を詳かにせんとせば
本書に併せて去る四月刊行の The Quarterly Review
に見えた Greece and King George の一編
を讀むを可とす

三田學會記事

三田哲學會講演大會

近來本學文學科頗に勃興し、就中純文學の發展は殊に顯著なるを
以て同哲學科は稍遜色あるを見るに至りしが茲に同學專攻者十數
人聊か察する所あつて相結んで三田哲學會なるものを組織したり
而して其第一着として之を具體的に現はしたるものは即ち去六月
十一日午後一時より本學大學二十五番講堂に於て開催せる同會講
演大會なり、先づ幹事堀梅天氏の開會の辭に次ぎ、文學博士遠藤
吉氏の「治道家と心理」(偉人と哲學)と云ふ題の下に治道家と
隆人間を全體として取扱ふ教育と社會を全體として取扱ふ政治と
の兩面を兼ねる所のものなりと説き起して人格と哲學との關係を
詳論し、思想を高尙ならしむると同時に一面精神修養の手引とな
る東洋哲學は大に究むるの要ありと結べり、次に藤井健次郎氏は
「道徳の根柢」と題し、先づ十八世紀末葉より十九世紀初期に亘れ
る功利主義を批評し、主觀的道德と客觀的道德とを區別し、吾人
が道徳上の責任を問はるゝは皆人格が行為に現はるゝが爲にして

人格の如何により行為の價値も定まるものなりと論及し、結局人
格の自覺は道徳の根柢なりと結び、最後に會長川合貞一氏は「自
私の意識」と題し、先づ近世心理學の由來より説き起し、本論に
入りてゼームス氏の自我に關する四個の見解(物的、社會的、心的
純的)を擧げ其中の純的自我は人格統一にして是れ即ち自我なり
と詳細に氏が鑑畜の一部を吐露したり、散會したるは午後五時に
して當日は教授學生等多數の出席ありて甚だ盛會なりき、因に記
す、同會にては眞面目に斯學を研究せむとする者の便宜を計り單
に文學科に在る者のみに限らず一般に入會を許容する事に決定し
たり。(は、は)

三田史學會大會

同會は去月十八日午後一時より慶應義塾大學第二十五番講堂に於
て第一回講演大會を開き小澤幹事の開會の辭に次ぎ、田中教授は
「慶應義塾と史學研究」と題し徳川時代に於ける歴史研究より説起
し支那朝鮮に於ける歴史研究に及び、それより義塾創立前の學者
の研究は史學と經學なりしと説き、義塾創立以來今日に至るまで
の歴史研究の概略を述べ更に十八世紀以來勃興したる啓蒙主義唯
理主義より十九世紀以來の研究狀態に移り、從來の研究法は科學
的研究に非ざるも歴史も亦自然科学の如く一の科學とせざる可ら
ずと論じて、バックル、ランプレイト等の説を擧げ、我慶應義塾
大學史學科は正に此任に當るべき重大なる責任ありと結べり次い
で阿部教授は、「アウガスト・ヘルと其自叙傳」と題し歴史と傳

三田學會記事

記とを區別して傳記は主觀的要素多しとの前提より、得意の筆を
振ひて其自叙傳により彼が六十餘年間の落魄たる生涯を語られた
り、次で大森金五郎氏は「延喜時代に於ける都鄙文化の懸絶」なる
演題の下に、一般に延喜時代は史上の黄金時代として考へらるれ
ど實は是れ都のみに於けることにして鄙に於ては、全く之れと反
對の狀態にありと説起し、其當時都に於ける學業の發達、學者の
輩出、貴族の狀態等を述べざれど醍醐天皇の延喜年間諸臣に治國
の意見を提出せしめし時、三好清行の意見書には、都のみ榮え鄙
は至つて衰亡せる故之れを救済せざる可らずとあるが如く都と鄙
とは其文化に於て大なる運庭ありと詳細に論ぜられたり、最後に
宇野哲人氏は「儒教の根本思想を論じて支那歴史研究法に及ぶ」と
題し、儒の意義より説起して、孔子の根本思想たる仁の意義に
及び、我國大化の革新、鎌倉幕府の創設等其裏面は儒者によりて
行はれたりと説き、鬼に角儒教の根本思想は支那歴史研究の上に
必要なるものなりとし、從來支那歴史は手本、目的、濟世等のた
めに書かれたるを以て、科學的の歴史として見ることを能はざれど
も、さりとて凡て學問の研究に於て科學的のみにては無味乾燥な
り、學問の研究に於て殊に人間を對象とする精神科學に於ては、
人間を物質として見るのみにては不充分なりと論じ、要するに歴
史の研究に於ては科學的方法を執るは素よりなるも、從來支那に
於ける研究法の如きも或點に於ては全然没却することなく、兩者
相提携茲に始めて研究の効果を待べきものなりと結べり、散會し
たるは午後五時頃にして川合、神戸の諸教授を初め學生多數の出

席ありて頗る盛會を極めたり。(を、あ)

理財學會大會記事

六月十八日慶應義塾大學三十二番講堂に於て理財學會第五十回大
會を開き會する者五百五十餘名、創立以來稀有の盛會なりき。今
爰に其の概要を掲げ午後一時氣賀教授は起ちて開會の旨を宣し、
本會の歴史より其目的を述べ、次で河津博士は不正競争と商業道
徳なる題下に兩者の關係を論じ、不正競争取締方法に及べり、曰く
不正競争激甚なる米國よりも其度甚しき我國にとりては最も注意
を要する問題にして、取締その當を得ば經濟上の秩序發展のみな
らず商業道徳に及ぼす効果大なるものなれば、深き研究を爲さざ
る可からず。元來自由競争は今日の經濟界を現出せし基礎たるも
のなれど、それには明暗二面あるの結果經濟界の階級争闘起り貧
富の懸隔爲めに生ずるに至れり。之れ労働問題の原由を爲すもの
にして、不正競争は實にその一つを形作るものたり、その弊害多
大にして一は世人を欺瞞し他は正當なる競争者の利益を害し衆人
の經濟上の知識缺乏せるに乗じて他を欺き身は經濟上敗者なるに
拘はらず勝利者となり、相手の貨物を毀損して以て損害を及ぼし、
爲めに正當に營業に従事せる者の地を奪て、劣者の位置に立たし
むるに至る等其手段悪辣を極む、是れ近時各國が此不正競争を防
止せんが爲めに諸種の法規を設くる所以なれど果して實績あるや
否やは疑問なり。之れ不正競争と正當なる競争との分界線を認む
る頗る困難なる爲めにして、前述の如く經濟界に於ける大原則た

る自由競争は經濟上深く廣くその根底を有するなれば、必ずしも不正競争のみを禁遏する能はずして正當のものに迄及ぼざるなきに非ず。之れ即經濟界の秩序を維持せんが爲めに法律却て反對の結果を及し、正當なる競争者に疑懼の念を懐かしめ延て産業の萎縮、經濟の不安を醸成することなしとせざるなり故に之を根絶するには一に商業道德の力に俟たざるべからず。最後に余輩の見る所を以てせんに、先づ不正競争を分つて二つとなすを得(○)E(○)E氏の如く、即ち一は特定の競争者を害せんとする意思に出でたる競争にして、之れ目的物の明かに定まれる場合、二は其の目的とするは一般の競争者を苦しめんとする場合なり、之等に對する各國の立法令を論評し、以て現行我國法の缺點を論じ、概括的の法律を作るは頗る難事なれば、寧ろ秩序を亂すもの、みを個々具體的に取締るの方法を講ず可く、慎重の考慮をもつて綿密に規定し且つ行はれ得るものを作成せざる可からずと結ばる。河津博士は萬能の人なり、政策に將た純理に行くとして可ならざるなく博士中錚々の名ある人也。次に阪谷芳郎男は「日本は未だ世界的強國にあらず、一等國としても三つの缺點あり」と題し大演説を試みられ常に時代の先覺者として、經世家として、國を愛するマジニエーの如き男の面目活躍せり。開口一番一個人も一國も或る點に於ては齊しく是れ活物にして、進まざれば必ず退き、寸毫も靜止する者にあらず、崇高なる理想に依り常に向上發展の途を講ぜざるべからざると説き、進んで、人間の生命は三段に分る青年、壯年、及び老年時代にして、老年には老人的思想あり、青年には青年時代の理想を以て進まざる可からず、之れ新舊思想の衝突する所以にして歴史に興味ある現象を呈す、而して青年の理想には小計と大計とあり小計とは一身一家を修むるとにして、大計とは國家を向上發展せしむるとなり、此等二者は青年たるもの必ず有せざる可からざる理想なり、然るに何ぞや、世の青年者流消々として就職難に汲々とし、第二の人生最大の目的を忘却せんとは吾人青年に大警告を與られ、之れより更に本論に入り世界的強國とは何ぞや、英の或學者は定義して「世界の總ての部分に於て直接の利害關係を有し、世界何れの場所に於ても其意見を聴聽せられざる可からざる資格を持てる國を云ふ」とさるは日本は果して之れに宛嵌まるや否や、日本が直接の利害關係を有する部面は未だ甚だ大ならずして、其の意見を傾聴せしむるの所極めて狭し未だ以て所謂世界的強國と爲すに足らず、再度の大戦を経て漸く世界に認識せられ、一等國の伍班に列せしめられたるも世界的一等國としては尙ほ三個の缺點あるを認むるを以て、國民は此弱點を救済し進んで世界的強國に進歩發展せしむるを理想とし、大に發奮努力せざるべからず其所謂三大弱點の一に數ふべきは

り、青年には青年時代の理想を以て進まざる可からず、之れ新舊思想の衝突する所以にして歴史に興味ある現象を呈す、而して青年の理想には小計と大計とあり小計とは一身一家を修むるとにして、大計とは國家を向上發展せしむるとなり、此等二者は青年たるもの必ず有せざる可からざる理想なり、然るに何ぞや、世の青年者流消々として就職難に汲々とし、第二の人生最大の目的を忘却せんとは吾人青年に大警告を與られ、之れより更に本論に入り世界的強國とは何ぞや、英の或學者は定義して「世界の總ての部分に於て直接の利害關係を有し、世界何れの場所に於ても其意見を聴聽せられざる可からざる資格を持てる國を云ふ」とさるは日本は果して之れに宛嵌まるや否や、日本が直接の利害關係を有する部面は未だ甚だ大ならずして、其の意見を傾聴せしむるの所極めて狭し未だ以て所謂世界的強國と爲すに足らず、再度の大戦を経て漸く世界に認識せられ、一等國の伍班に列せしめられたるも世界的一等國としては尙ほ三個の缺點あるを認むるを以て、國民は此弱點を救済し進んで世界的強國に進歩發展せしむるを理想とし、大に發奮努力せざるべからず其所謂三大弱點の一に數ふべきは

の損失あるは識者の夙に認むる所なり若し李斯の言に聽き篆字を廢すの手段として史書を火き、儒者を坑にしたる秦の始皇帝の類に倣ひ、新に羅馬字を以て國定文字と爲すの政治家若くは教育家あらば、蓋し憲法政治の創始者に譲らざる傳勳ならん。第二の弱點は

▲兵器製造、の獨立せざる是なり。政府之に就ては幾多の苦心を費せり、然れども未だ完成の域に進まず實に多少の遺憾なき能はざるなり、歐米巡視の結果に依りて見るに、將來に於ける戦争の勝敗は繫りて自動車飛行機の數の多寡に在り、然るに我國に於ては外國より材料の供給を仰ぐにあらずれば是等の兵器を製造するを得ず、軍艦大砲の建造も亦た然るのみならず平時に於ても、鐵に屬する工業の進歩せざる國は、到底國命を保つ能はざるを以て或年限内に製鐵事業の完成を期せざるべからざるなり。更に第二の弱點は

▲經濟の獨立、せざるにあり。日本は外債に依つて財政經濟を維持しつゝあるの現状にして個人にして債務ある者は完全なる獨立を保つ能はざるが如く、外債を辨濟し盡し、進んで債取國となるにあらずんば、到底一等國の地位すらも保つべからず、況んや外債を生産的に利用するに於ては、獨米兩國の如く大に國力を發展することを得べきは勿論なりと雖も、之を以て陸海軍の擴張費に充當するに於てをや、然るに近時陸海軍擴張の議は漸く高まり來り充たるが、歐米の政治家の言へるが如く、軍備の擴張は國家の存亡盛衰に關する問題にして、金錢問題にあらずれば國家の安

全なる場合に於て慰み半分に計畫すべきもにあらず。以上の三缺點あり之を記憶して、大理想を抱くは青年の急務なり、殊に應義塾生の急務なりと信ず。五十年前福澤先生は今日の日本をつくりしに非ずや諸君も之の抱負あらざる可からず。と説き去り説き來る、眞に覺者の聲と云ふ可し。嗚呼日本百年の榮光と平和とをもちたらず者は蜻蛉洲中阪谷男に待たずして誰ぞ。

第三席、機械的人物のみ多く存する今の世に、常に信念を説き道義的精神を論ずる豪氣なる性格の人、床次地方局長はやをら起ちて「地方經濟に就て」と題し、國力の充實國運の進歩は其根柢を深く地方の發展に置かざる可からざるものなれば、茲に聊か地方經濟に干し陳ぶる所あらんとて、地方振興策を吐露せらる、曰く、地方團體の財政は中央財政の如く近時著しく膨脹し、從て地方の借金如き一億五六千萬圓に達せり、而して地方經濟に關し余の特に世人の留意を望まんとするものは、(一)地方政團は今後教育、勸業、衛生、交通その他公共的設備を完うする爲尙幾多の政費を要すること、(二)地方の産業は低利なる資金の供給を得る能はざるが爲め發達の遅々たること、(三)世界の農業國たる我國に於て小農の數年々減少して商工業中心の都會的勢力に兼併せらるゝの事實是なり、此等は必ずしも單一なる原因より生ずるものにあらずるや勿論なりと雖も、立國の大策より見て農業の保護、産業の發達、地方政團の進歩を助長せざるべからざることは言を俟たず、近時決定したる郵便貯金を以て低利に地方政團に貸附を爲す事、又不動産銀行設立問題の如き、は少くも此地方經濟の渴望を踏し、

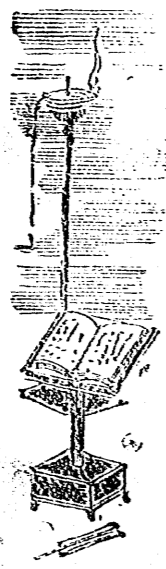
延ては國家的政策の一助として歓迎すべきものなるを信ずと説れたり。

第四席、本年度の歳計と題し若槻大藏次官は、理財學を研究せる者は數理に長じ、之に興味を有せざる可からず諸君に果して此の資格ありや否やを余は今試験せんと欲すと囁きつ、曰く、此は問題に非ずして既に事實となり、世間に熟知せられ居るものなるが此中多少説明を試むべきは、△歳入中酒造税の増収六百萬圓、煙草益金七百萬圓を増加したるが、一昨年増税の結果消費の減少を豫想したるに、事實は減少せざりしに因り新に歳入に組入れ、又満鐵配當金も本年度より三百五十萬圓を新たに歳入に加へたるものなり△關稅改正の結果四十四年度より、一千四百五十萬圓位を増加すべき見積なるが此問題に關しては近來内外に多少の誤解あるが如し我國從來の關稅率は大體安政條約に依る不當の稅率にして此期限の經過と共に我が稅額を恢復するは當然の事なり或は言ふ改正關稅率は高きに失すと、左れど之を從來の國定稅率に比するときは多くは減稅となり居るものにして改正率と雖も、之を歐洲の關稅率に比すれば尙甚だ低率たるなり。△歳出中官吏、下士卒の増俸は全體一千三百萬圓なるも行政整理に依り五百八十萬圓を節減し得たるを以て差引増加は七百四十萬圓に過ぎず△各省事業費は外交四十萬圓國防千三百萬圓、教育百四十萬圓、司法三百六十萬圓、産業百八十五萬圓、交通二百三十七萬圓、水利百萬圓、柘殖費百萬圓、理蕃費(特別會計)三百六萬圓、鐵道の建設改良(同上)一千三百萬圓を増加したり、△國債償還の爲め一般歳入より

七百五十萬圓を繰入れ合計六千八十萬圓を償還するの計畫を立てたるが此七百五十萬圓は歳出入を差引きて得たる純剩餘金を以て之に充てたるものにして、決して政府が遺算算段を爲したるものにあらず△本年二月より今日に至る迄政府は四億九千餘萬圓の國債償還を行へり最も此は一方に於て借替となり居るを以て實際の償還額は少額なれども、低利借替に依り國民は三百萬圓の利益を得ると同時に副産物として我國金利の水準點を低下し得たり。と煩雜なる數字を提へ來りて論ずること明晰精緻を極む次に謙讓の徳高き英國紳士の典型とも云ふべき莊田平五郎氏は二宮魯德翁に就て、と題して、余は二宮宗の者にはあらねど、世間には之れに對して誤解せる者あるを以て一言余の知れる所を述べんとす、近來内務省が二宮宗を振廻す結果世間の不景氣を醸せりと説く者あるは訝かしき事なり予の見る處にては、世間は決して不景氣にあらずして唯大景氣か小景氣かの度合の差あるのみ、斯翁の主義鼓吹の下に不景氣となるは恐らくは奢侈品商の如き一部分に過ぎざらん這是寧ろ不景氣を嘆ずること國家の利益なりと論じ、其より二宮氏の人物性格を評し、世人は極端なる儉約家とのみ思へど然らず實は己が實驗より得し一種の哲學者たり經濟學者たる、遠眼の士にして非常に *Optimist* にとみ、自尊の念強き人なりと、莊重なる態度を以て諄々と徐ろに述べられ大いに聽者の意を動かせり。最後に下村貯金局長は「東西家屋構造の差異よりして其の經濟上に及ぼす影響」と題し一、室内にて産する者は寢る事を考へ、腰掛け居る者は立つ事を思ふその結果日本人程不規則にして無性

なるものなく下女等を使ひたがる者なし、されど腰掛け居るものは止むを得ず規則的になるなりとて二者經濟上の相違を述べ、二、西洋家屋は堅牢なれども日本のは之れに反す、之れ日本と西洋との凡ての社會状態を示すものにして家屋の脆弱は總ての脆弱を惹起するものなり三、日本の多くの都會は都市にあらずして村落の集合なり而して交通機關なき時には都會各部にそれ〴〵需要供給を別に有する事となる可きなり今日の東京は猶かゝる状態にあり四、西洋の家屋の構造は鍵を下し得れども日本は然らず、故に前者は音響もれざる程なり且つ西洋は親子別居すれども日本は總て同居なり余は生活には表裏二面あるを宜しと信ず、と快辯を振はれ一時間半に亘る講演も人をして其の長きを覺えざらしめたり。

時正に八時、暮色は品海の彼方より來り稻荷山には老梟の聲一樹一樹より遠く日は全く暮れぬ。之れより談笑親睦を目的とする聯餐會は例の如く東洋軒樓上に開かれたり、來賓下村局長を始めとし鎌田塾長、石田幹事、及び諸教授の面々つとひ來る主客卓を挟んで座定まるや堀切教授は起ちて來賓に對し何等の風情なきを謝せられたり。既にナイフ、フォークの影納りて香茶の後、談笑の聲は雜然として四隅に湧く。三邊教授は、獨特のユーモアを交へて、例の長廣舌を弄し、次で福田博士起ちて下村學士に對し振替貯金をとるの煩雜なるを質問し、直ちに之れに對する答辭あり、それを相駁し相諧諒し論戰に花を咲かしつ。福田博士は再び立ちて吾が理財學界を詳細に紹介する所あり、下村氏も亦起ちて處世觀を説かれ、實業界に出でんとする者の數理と語學のゆる



かせにす可からざるをさとさる、縱橫笑語の内言々皆有益にして味あり、後進の感謝に堪えざる所なり。

談論風發時の移るを忘れしめ一夜の清興、つく可くもあらねど既に十時半を越へしかば、さらばとて陽々として春の如き理財學界の前途を祝して茲に宴を撤し、夜の幽寂を破りて己が家路につきぬ。

此の夜、月白く、風清し、初つ夏の若葉に露團々たり、當夜出席せられし諸氏左の如し、

來賓下村法學士、鎌田塾長、石田幹事、氣賀、堀切、星野、三邊等の諸教授及び松田三井銀行員。

篠部君、吉崎君、高柳君(以上三年幹事)

増井君、鈴木君、角田君、西谷君、廣井君、越山君、藤島君(二年幹事)

稻垣君、三次君、山口君、入江君、石川君、木下君(一年幹事)

(た、い)